

淡色の胞子を形成する日本産黒色系ツチダンゴ属の一種について

山本航平 (栃木県立博物館)

ツチダンゴ属 *Elaphomyces* (ユーロチウム目ツチダンゴ科) は、通常発達した外殻をもつ球状で地中性の子実体と、粉質の子嚢胞子の形成で特徴づけられる、外生菌根性の子嚢菌類である。国内からは属のタイプ種であるツチダンゴ *E. granulatus* をはじめ少なくとも 10 種以上が記録されている。しかし、この中には種の定義が未だ不明瞭な種が少なからず含まれ、また近年未記載種の発見も相次いでおり、国内に分布する本属の正確な種数の把握には至っていない。

演者は、2004 年に京都市左京区のコジイ樹下において、黒色で炭質の外殻を形成する小型のツチダンゴ属の一種を採集した。以後現在までに京都府を中心に、沖縄本島から栃木県に至る広範な地域で同種とみられる子実体を採集した。これらはいずれも黒色で炭質の外殻を形成していたことから、ツチダンゴ属の *Ceratogaster* 節に属することが推測された。本種の子嚢胞子は肌色を帯び、針状突起の表面をさらに外膜が覆う点が特徴的で、直径は約 27–30 μm と大型であった。*Ceratogaster* 節所属種のほとんどは褐色を帯びた暗色の胞子を形成し、淡色 (淡黄白色～肌色) の胞子を形成する種は僅かに *E. iuppitercellus* (カメルーン産)、*E. leucosporus* および *E. septatus* (ともにヨーロッパ産) が記載されているに過ぎない。このうち、前二種は胞子径や表面の突起が明らかに日本産標本とは異なった。一方 *E. septatus* は、胞子の形態およびブナ科樹下に発生することが多い点が日本産標本と類似した。しかし、本種は子実体が径 2–4 cm に達するのに対し、日本産標本は 1 cm を超えることはごく稀であるなど、相違点もみられた。両種の関係については今後詳細に検討予定である。

また、奄美大島における本種の発生地では 2 月頃に、菌生冬虫夏草 (ツチダンゴ属を宿主とする *Tolypocladium* 属種) の一種に寄生された状態の子実体が多数観察された。今回はこの菌生冬虫夏草について、これまでに得られた知見も併せて報告する。